

# 絆 求 め て

8月20日発行

文責 幼児教育専門員 久保田学



## 0・1・2歳児からのていねいな保育

皆さんは、フレーベル館から出版された、「0・1・2歳児からのていねいな保育（シリーズ全3巻）」という本をご存じでしょうか。初版が2018年11月、7年前の本であり今では書店等では扱っていません。

この本は汐見稔幸先生監修によるもので、汐見先生をはじめ、井桁容子先生、岩井久美子先生などが、執筆されています。ある先生から薦められ読んでみたのですが、保育実践に係るとても重要な内容に触れられていると感じました。今回は、そのシリーズの第3巻「ていねいな保育実践のために」から、私が大事にしたいなと感じた内容をまとめてみました。未満児保育を実施している園が増えるなか、日々の保育の参考になると思いますので、お読みください。

### 第1章 乳児保育の実践より

#### (1) 温かく応答的、受容的な保育とは

- \* 「応答的」・・・子どもの欲求を的確にとらえ、それに応ずること
- \* 「受容的」・・・子どものあらゆる行為に共感し、受け入れること
- \* 保育所保育指針には、「特定の保育士が応答的に関わるように努める」とある
- \* 乳児保育の場では、子どものタイプを見極めた上で、応答的かつ流動的な視点で担当者を決める。その上で、保育者同士の情報交換を密に行い、保育体制を考えていくことが重要

#### (2) 一人一人に応答的に関わるとは

- \* 保育者が子ども一人一人の行動をよく見て、その意味を理解すること
- \* 子どもの行為を、「よし・あし」で決めるのではなく、「もしかしたら、その行為には〇〇という意味があるのでは？」と共感的に捉えること
- \* 子どもの言葉にならない表現を、保育者が的確に捉えること

#### (3) 子どもの行為を表現とみるとは

- \* 子どもの一挙手一投足をその子どもの表現として見、それを「善く」解釈する。そうすればクラス全体の人間関係が豊かになっていく
- \* 保育者が、子ども一人一人に共感的なまなざしを向けることにより、子ども達は、子ども同士の関係において共感的でしなやかなコミュニケーション力を育てていく

#### (4) 乳児が学ぶ時

- \* 子どもには、生まれながらに「感覚」が備わっている。その子どもの感覚に寄り添い共感することで、子どもの営みが広がっていく
- \* 「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない。まず、感じる事が重要だ。・・・レイチェル・カールソンは著書「センス・オブ・ワンダー」でそう述べている。このことは、「感じることから”なぜ”と考へ、”どうすれば”と工夫し、”そういうことか”と納得する中で、”分かった”という学びにつながる。」ことを意味している

#### (5) 言葉の理解や発語

- \* 五感の中で、胎児期に最も早くからできあがるのが聴覚と言われる
- \* 乳児は、高い音が聞き取りやすいため、私たち大人が幼い子どもに接する時に、普段より少し高い声で、ゆっくりと話しかける（＝母親語。マザーリーズ）
- \* 子どもは自分に好意的な人から言葉を学ぼうとする
- \* 大人は、子どもを見ている存在ではなく、子どもに見られている存在であることを意識しなければならぬ

い

- \*子どもは日常の安心と安定を保障された人との関わりの積み重ねから、心地よい表情や言葉を写し取っていく
- \*大人の無意識の表情や行動が子どもの言葉環境に影響するため、乳児であっても、必ず目を見てゆっくりと丁寧に声をかけ、表情や反応を確認しながら、温かく優しい雰囲気子どもに関わるようにすることが大切

### **(6) 乳児のコミュニケーション**

- \*子どもは身近な大人が温かく好意的に関わってくれることで、人間が生きていくうえで大切な他者への強い信頼感と自分への肯定感が育まれ、人と関わることの心地良さを学んでいく
- \*コミュニケーションとは、自分を押し殺して他者に合わせるのではなく、自分の思いを大切にしながら他者との思いを調整する力のこと

### **(7) 安心、安全、清潔な保育環境**

- \*赤ちゃんの行動特性として、口に入れることを配慮する必要がある。…使用後の水洗いの徹底
- \*窒息事故防止…ミルクを飲んだ後は、胃の中で落ち着くまで、腹部を圧迫するような姿勢や激しく泣かせるようなことは避ける（大人の見守りが重要）
- \*子どもの周辺にある小さなものを確認し、口に入れないようにすること。→「これは口に入れないでね」とその都度、丁寧に危険性を伝えていく

#### **<おもちゃについて>**

- \*子どもの発達に合わせて、その子どもの成長・発達を応援できるようなおもちゃを準備する。（「保育所保育指針」…見る、触れる、探索するなど、身近な環境に自分から関わろうとすることを保障する）  
例）握るという動作が見られたら→細かい指の動きを必要とする物の準備
- \*遊びのコーナーを区切る。おもちゃごとにその特性を生かした配置にする。など
- \*教育的意図をもって環境構成する…子どもの成長、発達を援助することを意図しておもちゃを用意する

#### **<個人差を考慮した保育室>**

- \*一人一人の個人差を考慮し、保育室の環境をつくる→みんなが仲良く過ごすことを求める前に、まず一人一人の子どもが安心して過ごすことが保障された保育室となるように心がける
- \*その日に一番不安定な子どもに5分でも10分でも特別に関わることで、全体の安心・安全が図られることがある

#### **<家庭との連携について>**

- \*家庭との情報共有について…子ども一人一人を温かく受容し、そこから見えてきたその子らしい成長の様子を保護者に伝えていきながら情報共有していく
- \*他の家庭と比べない…保護者が園や保育者の評価を気にせず、子どもの様子を話せる関係づくりが、子どもの安心・安全な環境づくりには欠かせない

### **(8) 探索活動の意味**

#### **<子どもの意欲がのびのび発揮できる保育環境づくり>**

- \*一見、ただの困った行為の中にも、子どもの発見や好奇心につながるものがある→いけない事を否定する前に、子どもにとってどんな意味があつての行為なのかを知ろうとする姿勢が、乳児における教育を保障することになる
- \*子どもの知的好奇心を伸ばすには、子どもが意味をもっているものに自由に向かっている保育環境を保障することが大切。（みんなで一緒に絵本を読む、滑り台で遊ぶなど、子どもをまとめることは、本来の保育ではない）
- \*個別の探索活動からその子の特性を見つけ、保護者と共通理解を図る（保護者は、他児との比較で我が子を理解する面が強い→比較による理解は否定的になりやすい→だから、保育者は、その子どもらしい良い所を発見し、具体的に伝えていく）

### **(9) 五感を使って学ぶ**

#### **<五感を刺激する経験を重ねていける環境づくり>**

- \*赤ちゃんは胎児の早い時期から聴覚ができあがっている。また生まれる時には五感（視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚）が備わっている
- \*様々な感覚を通して、子どもが感じ、気づいて、考える事のできるような、経験を豊かに重ねられる環境を

準備すること

- \* 大人の感覚で捉えて心地よさを押し付けず、子ども一人一人がどのように感じているかを探りながら、その子どもにとって心地よい経験、状態を少しずつ増やしていくようにする
- \* 生活の中で“いたずら”や“困ったこと”と見える行為には、子どもが自分の五感を刺激したいための行為であることが多くある  
例：物を何度も落としてみる行為、ご飯を手でにぎにぎする行為

### (10) 手指を使って遊ぶ

<手指の使い方と目の動きで子どもが理解できる>

- \* 手指の使い方…子どもの知的な育ちが分かる（発達や特性）
- \* 目の動き…子どもの成長、発達の状況や興味・関心のあることが分かる

### (11) 全身を使って遊ぶ

- \* 大人や子どもとの温かい触れ合いを通して、心地よい体験を積み重ね、「近づいてみたい」「やってみよう」という意欲が引き出されていく環境にすることが大切
- \* 乳幼児の育ちの個人差は大きいので、同じようにできているかという視点ではなく、その子の取り組みの内容や心の機微をみるのが大切
- \* 全身を使った遊びでは、子どものタイプ（元気に遊びまわる子、静かに何かに取り組む子 など）によって遊びの場所や遊具を設定する。それによって安心して楽しむことができる

### (12) 保育者の危機管理の意識と知識

- \* 日常生活の中で、大人に指示されて決まった行為をすることで危険を避ける経験だけでなく、様々な感覚を使って自分で危険を感じる経験が重要である。（日頃から、指示的な対応を減らすことで、自分で気を付ける子どもに育っていく）

## 第2章 「1歳以上3歳未満児の保育実践」より

### (1) 生活リズム

<安心と安定のなかで>

- \* 1歳児位までは、子どもの発育、発達、体力、生活リズムの個人差が大変大きい。特に睡眠や食のリズムには個人差があるので一律にはできない。→乳幼児保育の環境は、集団で生活することを強いられてしまう環境である。子ども一人一人のリズムを尊重することを最優先し、集団としてまとめることを意識する場にならないように注意する
- \* 決まった時間に、食事や睡眠をさせることを「規則正しい生活」だとする捉え違いによる、生活リズムを一律にし、一斉に行うことは避けたい
- \* トラブルに対しては、双方の気持ちを代弁する共感的な言葉で、お互いに相手の気持ちを理解する経験に変えていく→「ごめんね」「いいよ」というような表面的な言葉によって解決を急ぐことは避けたい

<食について>

- \* 1・2歳児の食で大切なのは、いろいろな味との心地よい出会いをすることにあり、好き嫌いなく何でも残さず食べる事ではない
- \* 他の人との関係性を含めた心地よい食の経験の積み重ねがあって、しだいに食べられるようになる
- \* 子どもには、初めて見たものを本能的に危険だと感じて警戒し、食べないということはよくある

<睡眠について>

- \* 1・2歳児では、午後2時間程度睡眠をとれば、夜の睡眠まで持つ。ただし、1歳児では、個人差が大きい。一人一人の生活リズムを把握し、それに応じた睡眠の配慮が必要
- \* 食事中に眠くなった場合は、口の中に食べ物が残っていないか必ず確認し、食べる事よりも睡眠を優先させる。（窒息の可能性あり）

### (2) 自我の育ち

- \* 1・2歳になると「嫌だ」とか「こうしたい」と言った自分の思いを表現する言動が目立ち始める。この時

期に「嫌だ」と自分の意思を表現することは、心の育ちの上で大変重要

- \*子どもに「嫌」と言わせないためにどうしたら良いかを考えるのではなく、「嫌」と言えるのびのびと自己発揮できる環境を整えること。事故や命にかかわること以外は、できるだけ子どものその思いにつき合っていくことが重要である

### (3) 清潔の心地よさ

- \*清潔の心地よさを知る体験は、0歳児からある。保育者は、丁寧に言葉を添えながら心地よい体験を保障していく意識をもって関わるのが大切（言葉の意味と、快・不快の感覚を結び付け理解させる）

### (4) 衣類の脱着

- \*着脱には「養護」の要素だけでなく、「教育」の要素も十分ある

### (5) 排泄の自立

- \*排泄の機能が出来上がった目安は、排尿感覚が2時間以上になり、尿意を言葉や態度で表現でき、自分で歩いてトイレに行けること

### (6) 共に過ごす心地よさ

- \*自分の気持ちが分かってもらえて、安心できる場所という実感が、他者と関わる意欲につながる
- \*満足して過ごせるには、できるだけ少人数のグループで活動するのが望ましい

### (7)トラブルと育ち合い

- \*「貸して」「いいよ」「ごめんね」「いいよ」「入れて」「いいよ」などのパターン化されたやりとりは、子どもにとってどのような学びになっているのか？→貸すことを納得していなくても、口先だけで応え、譲られるということを学ばば、自分の気持ちを抑え込むことになり、子どもの心に無力感を育ててしまうことになる。その結果友達はいらないという社会性の無い子になってしまう
- \*自分の思いは表現して良いけど、相手にも思いがあることを知り、どうすれば良いか考えることが大事だということに気付いていくことが、トラブルで学ぶこと

### (7) 五感を使って

- \*五感を通して子どもが感じた事に対し、保育者は子どもが感じたことを自由に表現する機会を奪わないことが大切である
- \*保育者は、子どもに教える前に、子どもがどのように受け止めるか、感じたことをどう表現するかを、一人一人に目や耳を傾けて知ろうとすることが大切

### (8) 絵本

- \*読み聞かせの人数は少人数で。1・2歳児の場合は3人くらいがベスト
- \*子どもを静かにさせたいという「場つなぎ」として読み聞かせをすると、絵本が我慢の時間になってしまう

### (9) 身近な生き物

- \*「蟻を踏んではいけません」と叱るよりも、踏んだらどうなるかを経験した上で、かわいそうなことをしたな、踏まない方がいいなと思えるようになることが、1・2歳児が生き物と関わる意味である

### (10) 表現を楽しむ

- \*表現は、単に絵を描いたり、歌を歌ったり、言葉にしたりできるものではない。感じた事、気持ち、置かれている状況や思いを外に出すことすべてが表現である
- \*不快、不満、不安などの、ネガティブな状況や状態を表出することも、命を守る意味で大事な表現である
- \*子どもが自分の感覚を通して豊かに感じ、感じた事を表現したくなるような様々な工夫をすること

### (11) 友達の遊びから学ぶ

- \*保育者は「○○ちゃんはこういうつもりでやったのね」と、子どもの行為や結果にわけがあることを言語化していく。そうすることで子どもは、友達のしていることに興味を持つようになる。反面、保育者がその子の行為をネガティブにとらえると、周りの子もその子のことをネガティブな見方をするようになる